




普通高等教育“十一五”国家级规划教材

21世纪日语本科系列多媒体教材



标准日语 现代语法教程

陈访泽 刘小珊 编著

华南理工大学出版社



普通高等教育“十一五”国家级规划教材
21 世纪日语本科系列多媒体教材

标准日语

现代语法教程

陈访泽 刘小珊 编著



华南理工大学出版社

· 广州 ·

内 容 简 介

本教程以词法为重点,同时吸收了敬语法和句中较为成熟和实用的部分,内容分为十章。第一章为绪论,概述日语语法的范围和特点;第二章至第七章为词法,按词类划分进行描述;第八章为敬语法,采用了最新的敬语分类;第九章和第十章为句法,描述句子成分和句子类型。

本教程可作为日语专业本科生高年级阶段的专业课教材,也可以作为研究生入学考试日语语法方向或其他各级日语语法考试的参考书。

图书在版编目(CIP)数据

标准日语现代语法教程/陈访泽,刘小珊编著. —广州:华南理工大学出版社, 2009. 1

(21世纪日语本科系列多媒体教材)

ISBN 978-7-5623-2781-3

I. 标… II. ①陈… ②刘… III. 日语-语法-高等学校-教材 IV. H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2008)第 201409 号

总发行:华南理工大学出版社(广州五山华南理工大学17号楼,邮编510640)

营销部电话:020-87113487 87110964 87111048(传真)

E-mail: z2cb@scut.edu.cn

http://www.scutpress.com.cn

责任编辑:徐明媛 潘宜玲

印刷者:广州市穗彩彩印厂

开本:787 mm×960 mm 1/16 印张:23.25 字数:465千

版次:2009年1月第1版 2009年1月第1次印刷

印数:1~3000册

定价:38.50元

版权所有 盗版必究



前 言

语法到底是什么？把语言想象成一个游戏，你每天都通过听、说、读、写等各种各样的途径来参与这个游戏。每个游戏都有游戏规则，语法其实就是这个游戏的规则。实际上，你的任何活动都遵循了一定的规则。

本教程为普通高等教育“十一五”国家级规划教材。在教育部高等院校日语专业教学指导委员会和华南理工大学出版社的支持下，历时3年编著而成。本教程从2003年开始以试用教材的形式在日语专业的高年级教学中使用，由于体系性和针对性强，内容能够跟其他教材互相衔接，课堂上有配套的练习题便于教师讲课和学生自主学习，一直受到各方面的好评。通过本教程的学习，学生的日语运用能力提高很快，社会效益显而易见。被列入国家级规划教材后，我们于2005年下半年开始在原有的基础上不断充实和修改内容，完善整体架构，使教材更加趋于完善。

现代日语语法作为日语专业的一门必修课程，有关这方面的专著和参考书不下几十种。由于这一学科在国内已经具有深厚的传统基础，因此我们在安排本教程的结构和内容时确定了这样几点原则：（1）充分吸收以往的日语语法书中科学合理的部分；（2）最大限度地反映这一学科的新的成熟的研究成果；（3）尽量从日语教学的实用目的出发来解释语法的理论问题。本教程以词法为重点，同时吸收了敬语法和句法中较为成熟和实用的部分，内容分为十章。第一章为绪论，概述日语语法的范围和特点；第二章至第七章为词法，按词类划分进行描述；第八章为敬语法，采用了最新的敬语分类；第九章和第十章为句法，描述句子成分和句子类型。

为了配合日语专业高年级的其他课程需要，以及近年来不断增长的日语研究生考试需求，本教程全部采用日语表述。本教程可作为日语专



业本科生高年级阶段的专业课教材使用，也可以作为研究生入学考试日语语法方向或其他各级日语语法考试的参考书。课程按每周2课时开设，可满足1学期的使用。

本教程由陈访泽、刘小珊编著，聂中华、徐淑丹、吕春燕、苏鹰为本教程部分章节的编写工作提供了协助。本教程的编写得到了国家重点文科基地——广东外语外贸大学外国语言学及应用语言学研究中心的资助。此外，在本书的编写过程中参考了相关著作和研究文献，在此谨向各位编著者致谢。内容虽经过多次修改，但不妥之处在所难免，敬请广大读者批评指正。

陈访泽

2008年8月于日本京都

目 录

第一章 文法序説	(1)
第一節 日本語の文法	(1)
一、文法とは何か	(1)
二、いろいろな文法	(2)
三、文法の学習	(2)
第二節 日本語の文法単位	(2)
一、語	(3)
二、文節	(4)
三、連語	(5)
四、文の成分	(6)
五、節	(7)
六、文	(8)
第三節 日本語の文法特徴	(9)
一、膠着	(9)
二、活用	(10)
三、語順	(10)
四、敬語	(11)
第二章 体 言	(12)
第一節 名 詞	(12)
一、名詞の分類	(12)
二、名詞の文法特徴	(14)
三、名詞の格	(16)
第二節 代名詞	(18)
一、代名詞の分類	(18)
二、代名詞の文法特徴	(22)
第三節 数 詞	(26)





一、数詞の分類	(26)
二、数詞の文法特徴	(30)
三、数量表現	(32)
第四節 形式名詞	(33)
一、形式名詞の種類	(34)
二、形式名詞の意味用法	(34)
第三章 用言(一)動詞	(53)
第一節 動詞の分類	(53)
一、活用による分類	(53)
二、目的語による分類	(54)
三、待遇表現による分類	(55)
四、アスペクトによる分類	(56)
五、機能による分類	(56)
第二節 動詞の活用形と用法	(57)
一、動詞の活用形	(57)
二、動詞の音便	(59)
三、各活用形の用法	(61)
第三節 自動詞と他動詞	(67)
一、自動詞と他動詞の対応	(67)
二、自動詞と他動詞の変換	(68)
三、中国語と日本語の自他表現	(69)
第四節 敬語動詞	(70)
一、尊敬語動詞と尊敬語補助動詞	(70)
二、謙讓語動詞と謙讓語補助動詞	(71)
三、丁寧語動詞と丁寧語補助動詞	(73)
四、美化語動詞	(73)
第五節 授受動詞	(73)
一、授受動詞	(74)
二、授受補助動詞	(75)
三、授受補助動詞の特殊用法	(78)
第六節 補助動詞	(79)



一、補助動詞の概念	(79)
二、その他の補助動詞の用法	(79)
第七節 動詞のテンス	(85)
一、現在形	(85)
二、過去形	(86)
三、絶対テンスと相対テンス	(87)
第八節 動詞のアスペクト	(88)
一、アスペクトの体系	(88)
二、一般相	(89)
三、過程相	(90)
第九節 動詞のヴォイス	(92)
一、能動態	(93)
二、受動態	(93)
三、使役態	(95)
四、可能態	(96)
五、自発態	(97)
六、敬語態	(98)
七、被役態	(99)
第四章 用言(二)形容詞と形容動詞	(100)
第一節 形容詞	(100)
一、形容詞の分類	(100)
二、形容詞の活用形と音便	(102)
三、各活用形の用法	(104)
第二節 形容動詞	(109)
一、形容動詞の分類	(109)
二、形容動詞の活用形	(110)
三、各活用形の用法	(111)
四、形容動詞の言語文体	(115)
第三節 その他の補助用言	(116)
一、補助形容詞	(116)
二、補助形容動詞	(119)

第五章 副用語	(121)
第一節 副詞	(121)
一、副詞の分類と意味	(121)
二、副詞の用法	(125)
三、副詞の構成	(127)
四、副詞と他の品詞	(128)
第二節 連体詞	(129)
一、連体詞の用法	(129)
二、連体詞の由来と構成	(130)
三、連体詞と他の品詞	(132)
第三節 接続詞	(133)
一、接続詞の分類と意味	(133)
二、接続詞の用法	(135)
三、接続詞の構成	(136)
第四節 感動詞	(138)
一、感動詞の分類と用法	(138)
二、感動詞の由来と構成	(140)
第六章 助動詞	(142)
第一節 助動詞の分類	(142)
一、文法的な意味による分類	(142)
二、活用による分類	(143)
三、接続方法による分類	(143)
四、助動詞の相互承接	(143)
第二節 受身の助動詞	(144)
一、接続と活用	(144)
二、意味用法	(145)
三、動作主体表示	(146)
第三節 可能の助動詞	(147)
一、接続と活用	(147)
二、意味用法	(147)





三、助動詞と慣用文型の区別	(148)
第四節 自発の助動詞	(149)
一、接続と活用	(149)
二、意味用法	(150)
第五節 尊敬の助動詞	(151)
一、接続と活用	(151)
二、意味用法	(152)
第六節 使役の助動詞	(152)
一、接続と活用	(152)
二、意味用法	(153)
三、動作主体表示	(154)
第七節 被役の助動詞	(155)
一、接続と活用	(155)
二、意味用法	(156)
第八節 打消の助動詞	(156)
一、接続と活用	(156)
二、意味用法	(157)
三、「ないで」と「なくて」	(158)
第九節 推量の助動詞	(159)
一、接続と活用	(159)
二、意味用法	(160)
三、助動詞「らしい」と接尾語「らしい」	(161)
第十節 打消推量の助動詞	(162)
一、接続と活用	(162)
二、意味用法	(163)
第十一節 過去の助動詞	(164)
一、接続と活用	(164)
二、意味用法	(165)
第十二節 希望の助動詞	(166)
一、接続と活用	(166)
二、意味用法	(167)
三、対象を表す「が」と「を」	(168)



第十三節 指定の助動詞	(169)
一、接続と活用	(169)
二、意味用法	(170)
第十四節 様態の助動詞	(172)
一、接続と活用	(173)
二、意味用法	(173)
三、「そうだ」と「ようだ」	(175)
第十五節 伝聞の助動詞	(175)
一、接続と活用	(176)
二、意味用法	(176)
三、「そうだ」と「ということだ」	(177)
第十六節 比況の助動詞	(177)
一、接続と活用	(177)
二、意味用法	(178)
三、「ようだ」と「らしい」	(180)
四、「ように」と「ために」	(181)
第十七節 丁寧の助動詞	(182)
一、接続と活用	(182)
二、意味用法	(183)
第七章 助詞	(184)
第一節 助詞の分類	(184)
一、関係を表す助詞	(184)
二、意味を補足する助詞	(185)
第二節 格助詞	(185)
一、が	(186)
二、を	(187)
三、に	(188)
四、で	(191)
五、と	(192)
六、へ	(194)
七、から	(194)

八、まで	(196)
九、より	(196)
十、の	(198)
十一、複合格助詞	(198)
第三節 接続助詞	(200)
一、て(で)	(201)
二、ながら	(202)
三、つつ	(203)
四、し	(203)
五、なり	(204)
六、や	(204)
七、から	(205)
八、ので	(205)
九、ば	(207)
十、と	(208)
十一、ては(では)	(209)
十二、が	(210)
十三、けれども	(211)
十四、のに	(212)
十五、ものの	(212)
十六、ても(でも)	(213)
十七、たって(だって)	(213)
十八、とも	(214)
第四節 並列助詞	(215)
一、と	(216)
二、や	(216)
三、やら	(217)
四、とか	(217)
五、だの	(218)
六、たり	(219)
七、か	(219)
八、なり	(220)





九、に (221)

十、の (222)

第五節 係助詞 (223)

一、は (223)

二、こそ (225)

三、さえ(できえ) (226)

四、すら(ですら) (227)

五、しか (227)

六、も (228)

七、でも (230)

八、だって (232)

第六節 副助詞 (233)

一、ばかり (233)

二、だけ (235)

三、きり (237)

四、まで (237)

五、ずつ (239)

六、のみ (239)

七、くらい(ぐらい) (240)

八、ほど (241)

九、など (242)

十、なんか(なんぞ) (243)

十一、か (244)

十二、やら (245)

第七節 終助詞 (246)

一、か (246)

二、かしら (247)

三、かな (248)

四、わ (248)

五、こと (249)

六、もの (250)

七、の (250)



八、ぞ	(251)
九、ぜ	(251)
十、い	(252)
十一、け	(253)
十二、とも	(253)
十三、ね	(253)
十四、よ	(255)
十五、さ	(256)
十六、や	(257)
十七、な	(258)
第八章 敬語	(261)
第一節 尊敬語	(261)
一、動詞の尊敬語	(261)
二、名詞の尊敬語	(265)
三、その他の尊敬語	(267)
四、尊敬語の序列と使用	(267)
第二節 謙讓語	(268)
一、謙讓語Ⅰ	(269)
二、謙讓語Ⅱ	(272)
三、謙讓語の序列と使用	(275)
四、謙讓語の使用に関する注意点	(276)
第三節 丁寧語	(277)
一、丁寧の助動詞	(277)
二、動詞の丁寧語	(278)
三、その他の丁寧語	(278)
四、丁寧語の序列と使用	(279)
五、丁寧語の使用に関する注意点	(280)
第四節 美化語	(281)
一、名詞の美化語	(281)
二、動詞の美化語	(282)
三、美化語の使用	(282)



第九章 文の成分	(284)
第一節 直接成分	(284)
一、述語	(284)
二、主語	(289)
三、目的語	(291)
四、対象語	(294)
五、補語	(296)
六、連用修飾語	(300)
第二節 間接成分	(302)
一、連体修飾語	(303)
二、同格語	(308)
三、並列語	(309)
第三節 独立成分	(310)
一、接続語	(310)
二、提示語	(313)
三、感動語	(314)
四、挿入語	(315)
第十章 文の構造類型	(317)
第一節 単文	(317)
一、単文の概念	(317)
二、単文の基本文型	(318)
三、単文の認定	(324)
第二節 包摂文	(326)
一、包摂文の概念	(326)
二、包摂文の種類	(327)
三、包摂文の認定	(332)
第三節 主従文	(333)
一、主従文の概念	(333)
二、主従文の種類	(334)
三、主従文の認定	(336)

第四節 並列文	(337)
一、並列文の概念	(337)
二、並列文の種類	(338)
三、並列文の認定	(339)
第五節 多重複文	(340)
一、多重包摂文	(340)
二、多重主従文	(341)
三、多重並列文	(341)
付録一 コソアド体系表	(343)
付録二 助数詞表	(344)
付録三 自動詞他動詞対応表	(349)
参考文献	(351)





第一章 文法序説

第一節 日本語の文法

文法とはどんな概念なのか。文法は高度的に抽象された言語の法則である。具体的に言えば、文法は言語単位の構成、語の種類、語形変化、要素間の関係、文の構造や構成などを説明する法則である。

一、文法とは何か

言語には一定の法則があり、この言語の法則が文法である。だが、一般に「文法」という概念には二つの意味がある。一つは言語の内部に客観的に存在する法則の体系で、即ち語形変化の法則、構文の法則などの総和である。もう一つはこれらの法則を研究する学問で、即ち文法法則の体系を探究する科学的な理論である。例えば、次の(1)の記述は前者の意味で、(2)の説明は後者の意味である。

- (1) 「帰る」に「ます」がつく場合、「帰る」は「帰り」になり、それから「ます」と結びつく。
- (2) 「帰る」は五段動詞で、連用形の「帰り」に語形変化し、「ます」は丁寧の助動詞で、動詞の連用形につく。

客観的な法則体系としての文法は一つの言語に一種類しかないが、文法の法則を探究する理論としては、一つの言語に何種類もあることが可能である。「日本語の文法は乱れていて、文法書はみな違っている。」という人がいる。これは実は文法理論のことを言っているもので、文法法則そのものは乱れていない。研究者たちがある文法現象について異なった説明の方法を取り入れたに過ぎない。

文法（文法論）の内容は、狭義では品詞論と構文論を指す場合が多いが、広義では語構成論や文章論も含むことがある。本書では講義の時間数を考えて、品詞論を中心に敬語法と構文論も必要な部分を取り入れることにする。